

冬の彩

J R 軽井沢駅
細江

久美子（撮影・文）

氷点下まで気温が下がる季節となりました。軽井沢の木々はすっかり落葉しましたが、代わりに煌びやかな光に彩られています。真っ暗な冬の街に揺らめく淡い光は、氷点下の軽井沢の冬も、訪れた人の心も温かい気持ちにさせてくれます。

（在：軽井沢）



今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

「子供は子供だった頃」（部分）

ペーター・ハントケ

子供は子供だった頃腕をブラブラさせ小川は川になれ 川は河になれ水たまりは海になれ と思った子供は子供だった頃自分が子供とは知らず

すべてに魂があり 魂はひとつと思った

（中略）子供は子供だった頃いつも不思議だったなぜ 僕は僕で君でない？なぜ僕はここにいて そこにいない時の始まりは いつ？宇宙の果ては どこ？この世で生きるのは ただの夢？見るもの 聞くもの 嗅ぐものはこの世の前の幻？

ヴィム・ヴェンダース監督の映画「ベルリン・天使の詩」の冒頭にはペーター・ハントケの詩「子供は子供だった頃」が使われている。

私は、この詩が気に入っていて、何度もDVDを止めて、書き取った覚えがある。映画のはじまりの部分、白い紙の上に、ペンを握った手が文字を記し、男の声がリズムカルに朗読する。この詩の作者ハントケが、今年のノーベル文学賞を受賞した。

ハントケは毀誉褒貶が相半ばする文学者だ。旧ユーゴスラビアは多くの民族を束ねた国家。その解体過程、内戦が繰り返される。最も強い勢力を持っていたのはセルビア人たち。西側諸国はセルビア人を悪と見なす図式をつくり、アメリカの広告代理店が「ジェノサイド」というキャンペーンをはる。この図式にハントケは異議を唱えた。多くの知識人に反発され、彼は孤立無援で戦った。

「子供は子供だった頃/自分が子供とは知らず/すべてに魂があり/魂はひとつと思った」その言葉に重ねられた映像、カメラは天空から街をみつめ、その後、一人ひとりの生活とその苦悩に寄り添う。ハントケは広告代理店が作り上げたキャンペーンを拒み、爆弾の下で生活をしている普通の人々に寄り添う。

子供の目に仮託された澄んだ目こそ、ノーベル賞に値するのかもしれない。

ペーター・ハントケ：1942年12月、オーストリアに生まれた現代作家。小説、戯曲、詩、翻訳まで幅広く活動。2019年ノーベル文学賞受賞

I 実践報告（1）

子どもたちのインフォーマルな学びの場の充実に向けて —沖永良部島から

外山千草（鹿児島県沖永良部事務所）

1 はじめに

私は現在、鹿児島県の島嶼部に位置する「沖永良部島」に拠点を置いています。

沖永良部島は奄美群島の南部に位置し、2町からなる人口約12,000人程度の島です。基幹産業は農業であり、温暖な気候を生かし、花き類、じゃがいも、さとうきび等の生産が盛んに行われています。

この沖永良部島において、業務としては鹿児島県の職員という立場で通算して約14年間、農政分野での食育活動、児童福祉分野でのケースワーク等に関わってきました。



また、業務外では、フラワーアレンジメント等の創作活動（成人対象や子ども対象）や子どもたちの様々な学びの場の企画・実施・支援を行ってきました。

そして、今後はこれらの活動をエビデンスに基づいた学術的实践に繋げ、子どもたちの成長や地域の学びの場の充実に貢献していきたいとの思いから、教育専門職大学院（離島でもテレビ会議システム「ZOOM」を用いることで通学が可能な大学院）に入学しました。現在、大学院では子どもたちのインフォーマルな学びの場のデザイン等に関する実践研究を行っています。

よって今回は、これまでの私自身の実践に至った経緯やこれまでの実践、今後の展望等についてご紹介させていただきます。

2 背景

(1) 子どもを取り巻く環境の変化 ～多忙な子どもたち～

「離島の子どもたちは自然に囲まれ、のびのびとすごしているのでしょう」

「海に囲まれてお仕事できるなんてさぞゆったりと暮らされているらっしゃるのでしょうね」

社会人学生として様々な地域の方々との交流の場面がありますが、まずは殆どの方からそうお声かけいただきます。

しかしながら、放課後は週3回のスポーツ少年団活動（子どもが少なくなっているためバレー、サッカー、ソフトボール、卓球等あらゆる種目に参加をせねばならない）、習い事（学習塾、ピアノ、そろばん、スイミング、英会話教室、琉球舞踊、エイサー）、休日はスポーツの試合が組まれるなど、子どもたちは恵まれた自然環境を生かした遊びや学びをのびのびと思う存分に楽しむような余裕がない現実があります。

家庭環境も都市部と同様、多様化・複雑化しています。保護者の多忙化による子どもとの関わりの減少や、ひとり親世帯の増加等の問題にも直面しています。児童福祉のケースワークに従事していた際も、各種ケースの深刻さや複雑さに心を痛め、何とかならないものだろうかと悶々とした日々を過ごしました。

奄美群島における児童虐待の相談件数はネグレクトの割合が高いこと、そして沖永良部島は児童虐待等に関する相談が近年増加傾向あること等が公表データによっても明らかにされています。支援環境も地理的特性上、十分に整備されているとは言い難い状況です。



(2) 子どもたちに求められるこれからの資質・能力

現在、子どもたちに求められている資質や能力として、「社会情動的スキル（非認知スキル）」が非常に注目されています。忍耐力、社会性、自尊心などの社会情動的スキルは、健康、市民参加、ウェルビーイングなどの社会的成果を推進するために、特に重要な役割を果たすことが研究により示されており、子どもの活躍や幼児期から青年期に触れる学習環境に起因することも報告されています。

(3) これからの学びに必要なことを

社会情動的スキルは家庭、学校、課外活動、地域活動において養われることが明らかとなっており、①家庭は、温かく習慣的な親子の関わりを通して、子どもの社会情動的発達を促進することができる ②地域社会は子どもが実践的経験を通して社会情動的スキルを学ぶ機会を提供することにより、家庭や学校の試みを補うことができる ③子どもの社会情動的スキルを対象とした成果を挙げているプログラムの多くが、学習環境との一貫性を持っている ④社会情動的学習は、不利な立場にいる子どもたちだけではなく、他のグループにとっても有効とされる ⑤社会情動的学習は幼児のみならず、青年にとっても有効であることがこれまでの研究等により示されています。

そこで、私は沖永良部島の良さである「自然」「文化」「コミュニティ」など、地域の特色ある資源を活用した交流と学びの場づくりに着目し、実践研究をスタートさせました。

島嶼部であるからこそ発揮できる特色を生かし、子どもたちが健やかにのびのびと育つためのオリジナルのプログラムづくりに着手しています。

3 具体的実践事例の紹介

(1) 子どもたちの「やってみたい」を大切に～「エコ」に関する探求の場～

学校での学びには時間的、空間的制約があります。しかし、家庭や地域での学びは、そのような制約がないことで、様々な可能性や資源を活用した学びが可能となります。

「学校ではこれは無理だって言われるんだよね」「休みの日にこそ楽しくみんなで調べたり、行ってみたりしながら勉強してみたいことだってあるよね」「興味ある友達同士で助け合って学んでみたら、おもしろいことが発見できそうじゃない??」そんな小学生の子どもたちの声を受け、子どもたち主体の学びの場づくりをサポートしました。

冬休みや休日を中心に、「エコについて学びたい」という子どもたちが集まりました。グループ名は「エコかつどう隊」。結成当初は3人の子どもに私ひとりの大人がサポートするという体制でした。しかし冬休みの最終日、子どもたちの声かけにより最終的には10人を超え、大人の応援団も少しずつ増えていきました。地元在住の研究者（大学名誉教授）に自然環境に関するレクチャーを受けに行く。小さなコミュニティで川を守っている地域の見学。エコに配慮するためにどのような交通手段を使うのが良いかまで子どもたちがそれぞれ一生懸命考えたエコ遠足。

この学びの場での気づきは自力で新聞としてまとめました。最終的には地域のイベントにお声かけいただき、イベント会場での発表まで子どもたち自らの力でやり遂げました。大人はぐっところえて見守り役。困ったときのファシリテートに徹します。子どもたちがやる気になった時が活動のタイミング。さりげなくそれとなく情報提供を行いながら、次に何をやりたい、というのか、知らないふりして見守っています。（忙しい子どもたちを急かす学びでは元も子もありません。）そうすると、なんとなくまたやりたいことが見つかって、やる気になってきたみたいです。

(2) 地域資源を活用した親子ワークショップの開催

今年の夏休みは、身の回りの植物から遊びや学びに展開するワークショップを開催しました。

地域の植物博士をアドバイザーとしてお招きし、島内にある植物素材を使った水鉄砲、工作、などなど。濡れながら、走りながら、時には図鑑で調べたり、直接博士に聞いてみたり。

大人も子どもも同じ目線で楽しみながら学ぶことができた夏のひとときでした。

その他、各種ワークショップを現在実施中です。

4 今後の展望

地域内外では様々な団体や公的機関がワークショップやセミナーを実施していますが、一日限りのイベント的な色合いが強くなっています。今後インフォーマルな学びにおいても、効果的なデザインをエビデンスに基づき整えて展開していくことにより、子どもたちの学びの可能性が大いに広がると考えています。

また、子どもたちと学びの場を共有していて最近特に気になる場面があります。自分で試行錯誤し、オリジナリティに満ちた解決策を出すということを諦めてしまっているのではないかと思われるような場面です。

子どもたちが自らワクワクしながら主体的に考え、試行錯誤を繰り返しながら解決策を導き出せるような場づくりも重要なポイントです。そのポイントをしっかりと押さえながら魅力的なプログラムを生み出していきたいと考えています。さらに、ひとりひとりの子どもの持っている限りない可能性を知ってもらい、成長を支えるためにも、「親子」「地域の資源」をキーワードとして盛り込んだ学び合いは今後も大切にしたいと考えています。

私自身、楽しみながらサポート役に徹していることで、子どもたちに日々多くのアイデアを頂いています。次年度のプランもワクワクしながら構想中です。より一層子どもたちの目が輝くことを目標として、今後学会等を通じて、より一層自己研鑽していきたいと考えています。

(引用文献)

池迫浩子・宮本晃司『家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆』（ベネッセ教育総合研究所（訳）、2015）、p. 31-33.



70 年前、東京のスラム街（後楽園球場の近く）で子ども支援活動 をしていた学生たち

深谷昌志（東京成徳大学名誉教授）

はじめに

子ども支援活動の記録が次々と「風の便り」に寄せられる中で、70 年前に学生たちが東京でしていた子ども支援活動を思い出した。

誰が想像できるだろうか。70 年前、現在の後楽園球場の近く、第二次世界大戦の空襲による焼け野が原に、焼け跡の材木やトタン板を集めて人々が作っていた 100 軒を越す大きなバタ屋部落があったことを。まだ地下鉄丸ノ内線が開通する前で、筆者の在学していた東京教育大学はその近く（現在の茗荷谷）にあった。

当時教育学部の「教育・心理学科」は定員が 60 名。2 年生に進級する時に、教育学科（1 学年 35 人）と心理学科（25 人）にわかれたが、それ迄の 1 年間は 60 人が同じクラスメートとして、同じ講義を聞いた。男子学生は黒の詰め襟の学生服、1 割程度だった女子学生は、ひだのあるスカートに、冬は黒の木綿の長靴下を履いて通学していた。まだナイロンの靴下がない時代だった。校舎は、

1 棟を除いてすべて木造の粗末な校舎であった。 ○スラム街から来た子どもたち

1953（昭和 28）年 12 月の初め、当時教育学部の 1 年生だった筆者に、御茶ノ水にあったカソリック教会から教会が主催する子どものためのクリスマス会で司会をしてくれないかと依頼があった。

当時の東京教育大学の教育学部は、高校教員になる人々が多い学部だったが、筆者は高校時代にバスケットに熱中する生活を過ごしてきたせいもあってか、人前でしゃべるのが苦手で、すぐに赤面し、声が出なくなる学生だった。これでは教員になれないと、大学に入学してすぐ「大塚講話会」に入部した。このサークルは、東京高等師範（東京教育大の前身）から続く名門の口演童話の継承を掲げるクラブだった。そして伝統的に、1 年生部員には毎週、口演童話を実践する課題を課していて、大学の近くの犬塚窪町小学校へ行って、昼食時に教室を借り、子どもたちに童話を聞いてもらうのが決まりだった。筆者は宮沢賢治の世界が好きだったので、「どんぐりと山猫」や「オッペルと象」を選んだが、子どもにこの世界を口話で伝えるのは難しかった。

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

「かねた一郎さま 九月十九日あなたはごきげんよろしいほで
けっこです。あした、めんどなさいばんしますから、おいで
んなさい。とびとぐもたないでくなさい。」

山ねこ 拝

しかし秋頃には、人前で話すのがそれ程苦手でなくなっていた。そうした時期に、武者修行をして来いと大塚講話会の先輩に言われて、お茶の水のカソリック教会のクリスマス会に出向いたのだった。

教会のドアを開けると、カソリック教会らしい荘厳な感じの礼拝堂の中にクリスマスの飾りつけがしてあった。案内されて食堂に入って驚いた。20人以上もの子どもたちを、シスターが子どもを一人ひとり裸にしてDDT（白い粉末消毒剤）をシラミ駆除のために、頭からかけて消毒した後で、入浴させて全身を洗う。出てくると新しい下着を与え、その子にあったサイズの洋服を着せる。子どもたちが身に付けていた汚れとシラミの服は、ゴミ袋に入れられた。

新品の洋服を着て、見違えるようになった子どもたちが礼拝堂に集まる。神父によるミサに続いて、クリスマスの食事会となり、その後で筆者は「セロ弾きのゴーシュ」を口演した。最後に、子ども一人ひとりにクリスマスプレゼントが渡された。

子どもたちが帰った後でシスターから、子どもたちは教会が布教活動をしているスラム街の子であること、次の日曜にその子たちのいるスラム街で、大人を交えてのクリスマス会を開くので、司会に来てほしいと頼まれたのだった。

○スラム街を訪ねる

スラム街は都電（17番）の春日町から降りて10分ほど歩いた所にあり、後樂園球場（現在の東京ドーム）の近く。後樂園球場は1988（昭和63）年に開設されたが、それ以前の球場はJR水道橋に近い所にあった。その裏手、正確に言えば球場の後ろにあった後樂園競輪場（1972年—昭和47年に廃止）の裏手に、大きなスラム街が広がっていた。徳川光圀が完成したという小石川後樂園も当時は荒廃しており、一部がスラムになっていた。場所は現在の地下鉄丸の内線の後樂園駅の真下にあった。

トタン屋根と焼けた木片の掘っ立て小屋が一面に並び、全体に一種の異臭が漂っていた。異様な風体の無気力そうな大人たちの姿もあったが、スラムの中には住いの地域と広場とがあり、広場には簡易食堂や露店の古着屋などが店を開くなど、それなりの活気があった。その中を汚れで手足や顔の真っ黒な子どもたちが走り回っている。静寂と騒音とが異様に混ざった奇妙な空間だった。

カソリック教会から小型トラックで運んできたオルガンの演奏で讃美歌が歌われた後に、クリスマス会が始まった。教会で会った子どもが寄ってきたが、プレゼント目当てに他の子どもたくさん集まってきて、それをスラム街の住人たちが取り巻いて見ていた。シスターによると、スラム街の子どもは誰一人学校へ行っていないので、読み書きが全くできない子が多く、この子たちの将来が心配だという。

この年の7月には朝鮮戦争が終結し、当時は朝鮮特需で人々が敗戦の痛手を癒すことができた時期にあたる。3年後の1956（昭和31）年の経済白書に「もはや戦後ではない」の名コピーが載せられた時期でもあり、いわば戦争の傷跡が消えた時期だったが、スラムには敗戦の傷跡が残り、全員が学校へ行けない子だった。そうした子どもたちの存在に衝撃を受けると同時に、教育学部の学生として、この子たちの力になりたいと思った。

○「校樂園子ども会」の立上げ

大学に帰って大塚講話会の先輩に協力を求めたが、童話の会にスラムの支援は無理だと反対された。そこでスラムの状況をクラスの仲間に話して、「あの子どもたちに読み書きを教えたいから、力を貸

してほしい」と頼んだ。教育と心理の数人がすぐ手を上げてくれたので、早速、仲間たちとスラム街を訪ねた。

それから週に1度の割合で、スラムへ行き始めた。それと同時に学内で「児童文化研究会」（児文研）を立ち上げ、大学の承認を得て、活動拠点としてサークル棟の中に部室を確保した。同じサークル棟には、子ども支援では先輩格の氷川下セツルメントの部室もあり、伝統のあるクラブからの助言ももらいたかった。しかし、その頃のセツルメントは代々木系の政治色が強かった。それだけに、誰かからの指示を受けるのではなく、自分たちの判断で行動したいと考えて、セツルメントとは別個に、仲間たちと支援活動を展開していくことにした。

といっても、自分たちだけでは何とも非力だったので、他大学の学生、とくに女子学生の協力を得たいと、仲間たちと手分けして、大学の近くにあったお茶の水女子大学、跡見学園短期大学、（現：跡見学園女子大学）、宝仙専門学校（現：こども教育宝仙大学）の学生たちに協力を求め、30人程のメンバーが集まった。当時スラムの住人たちが、自分たちの住む場所を「校楽園バタヤ部落」と称していたので、活動を「校楽園子ども会」と名づけて、全体を3グループに分け、それぞれが週

1回、全体では週に3回、スラムの子どもたちの支援に入った。

○A・S・ニールの書をバイブルに

子どもたちの力になりたいと勢い込んで入ったスラム街だったが、子どもたちは遠巻きしているだけで、近寄ってこない。形だけいっしょに遊んではくれるが、表情は硬いままだった。一人でスラムを訪ねてもみたが、子どもと打ち解けられない日々が続いた。

困り果てて、当時あった「日本子どもを守る会」（1952年設立、初代会長は長田新氏）に電話すると、児童心理学者の早川元二先生（法政大講師、守る会の常任理事。当時マスコミの寵児でもあった）が相談に乗りましょうとのこと。われわれの話を聞いた早川先生は「君たちは、子どもを教えようとしていませんか。教えようとするから、子どもは逃げる。教えるのを忘れて、思い切りいっしょに遊びなさい。そうすれば子どもの方から寄ってきますよ」そう言われて、ニールの「問題の教師」（ニール叢書、霜田静志訳、講談社、昭和25年）を手渡してくれた。

早川先生によると、ニールのサマーヒルの学園では、子どもは強制されることはなく、1日遊んでも、寝ていてもよい。しかし、そうした状況になると、子どもの方から勉強するようになる。しかも観念の世界の話ではなく、サマーヒルの学園は1921年の創設から20年以上実践をした実績があるという。

児文研の部室に戻って、仲間と共にニール叢書の勉強会を始めた。「勉強をしないで遊んでいいと教師が本当に思えば、子どもは勉強するようになる」とのニールの主張に疑心暗鬼ではあった。しかし、とにかく信じることにして、勉強のことは忘れ、子どもと遊ぶ気持ちで、メンコやビー玉などを持って、スラムに出かけることにした。すると、子どもの方から寄ってくるようになった。それ以来、ニールがわれわれの活動のバイブルとなった。

スラム街を紹介した責任者なので午後はほぼ毎日スラム通いをして、夜は家庭教師のアルバイトで忙しかった。当時の大学の授業は実に緩やかで、出席をとる授業は体育と英語だけ。教授の中には、年間でわずか4、5時間だけで、後は休講という教授もいるなど、学生の課外活動が自由に出来た時代だった。そうした縛りのない自由さの中で、筆者は岩井弘融先生の「教育社会学演習」だけには、欠かさず出席していた。ゼミの時に何となくスラムの話をする、岩井先生は関心を示され、スラムを訪ねてみたいと言われた。大学の先生がどうしてスラムに来られるのかと疑問ではあ

ったが、当日、岩井先生は先生の方からスラムの人たちに近づいて行かれた。気がつくと 20 分もしない内に、ドラム缶の火の回りにスラムの大人たちが集まり、何やら先生を中心に話が盛り上がっていた。われわれが2か月もかけてやっとスラムに受け入れてもらったのに、先生は一瞬でスラムのバリアを越えて、住人たちと談笑している。衝撃の瞬間だった。さすがに大学の先生はすごいと思ったが、翌週のゼミでスラムでの印象を先生に話すと、「先入観を捨てて、一人の人間同士として話すだけだよ」と言われた。

先輩に聞くと、岩井先生は当時反社会集団の研究者で、ヤクザの世界にも飛び込んでいかれた精力的な先生だとか。当時は都立大におられ、東京教育大学では非常勤講師だったが、その後、「病理集団の構造」（誠信書房、1963年）などを出版され、病理社会学の日本的な権威とされた先生であった。

○「子どもの家」を作りたい

1954（昭和29）年4月、新学期を迎えて、児文研にも何人もの新入生が入ってきて、スラム街での活動も熱気を帯びてきた。しかし、スラムの広場では遊び相手になることはできても、文字をきちんと教えられないし、子どもと落ち着いた話もできない。それだけに子どもとくつろげる「子どもの家」をスラム街内に作りたいと思うようになった。と言っても、先立つものはお金なので、資金集めを始めることにした。

（恐れ気もなく）東京都の教育委員会に相談に行くと、大学生10%の時代だったせいも、われわれが教育大学の学生グループだったことを買われたのか、都が主催する「緑陰子ども会」を担ってもらえれば、それなりの費用を出してくれるという。そこで、①片手使いの小さな人形を使った人形劇、②口演童話、③アコーディオンを使ってのリズム遊び等を骨子とする「緑陰子ども会」案を提出し、OKされて、土曜、日曜日に区の公園などで子ども会を開催した。同時に「人形劇団プーク（昭和4年に設立された伝統のあるプロの人形劇団）」に通って、仲間たちと両手使いの大きな人形を使う人形劇の技術を学んだ。

大学に戻って、プークで学んだ人形作りに励んだ。（新聞紙を丸めて球状にし、その上に新聞を刻んで水に浸しておいたものをフノリにまぜ、粘土状にして張り付け、凹凸をつけ、人形の顔とカシラを作る。何日も部室に吊るして乾燥させた後で、中の丸めた新聞紙を取り出して彩色し、片手づかいの大きな人形のカシラを完成させる。胴体として、人形の使い手の顔と上半身が隠れるぐらいの布を取り付けた。）

娯楽のない時代であった。若さの持つ大胆さと幸運にも恵まれて、三越劇場やサンケイホールで、子ども会を公演することもできた。今なら、教育大学という看板はあったにせよ、たかが大学生のグループには考えられない厚遇だったが、そうした公演のギャラを蓄えて、ほぼ半年で今の貨幣価値に換算して40万円ほどの貯えができた。

親しくなったスラムの住人たちに相談すると、予算内で小教室程度の建物が建てられるという。実際にスラムには元大工や元とび職がおり、どこから都合してきたのか。古材や建具、ブリキ屋根、ガラス窓等を集めてきて、2週間ほどで「子どもの家」ができあがった。こうした工務になると、われわれは全く無力で、スラムに住む人びとの底力を知る思いがした。

「子どもの家」ができたので、雨の日でも子どもと会えるようになった。それと同時に、子どもに読み書きを教えようと、教科書会社を回って教科書やドリルを寄付してもらうことにした。ドリルを使った読み書きの勉強が始まったが、残念ながらスラムの子どもたちは、勉強が苦手だった。

そこで「お絵描き」の時間を設けると、ドリルの時は寝ている感じの子もたちがその時間になると生き生きする。それ以後、子どもの家の活動に、フィンガー・ペインティングを導入して、当時入学したての大学1年生にそれを担当してもらうことにした。以後ドリル等の勉強はおまけにすることにした。

○子どもを学校へ行かせたい

怒涛のような1954（昭和29年）度が終わり、1955（昭和30年）度を迎えて、我々も3年生となった。児文研も新入生を迎え入れて活気を増した。スラムの中の「子どもの家」には（違法に引いてきて？）電気も通るようになったので、近くの文京区役所から、毎週「幻灯機（スライド映写機）」を借りてきて、幻灯会を開くことにした。テレビのない時代に、幻灯会は子どもたちの人気を集めた。親しくなった住人に鍵を渡して、子どもの家の管理を依頼し、われわれの行かない時でも子どもたちが「子どもの家」を自由に使えるようにした。われわれ学生も、スラムに「わが街」という感じを持てるようになって、子どもだけでなく大人たちとも親しくなっていた。

しかし、手分けして週に3回程度訪ねる程度では、子どもの学力をつけることは困難だったので、スラムの子どもたちを地元の学校へ通わせたいと、文京区役所と折衝を始めた。給食費などの学費を、スラムの家庭から通う子どもからは徴収しないことをお願いした。無理筋の要望なので折衝は難航した。しかし、スラム街に住む人の生活を説明し、半年後に何とか区の了解を得ることができた。これで、子どもが学校に行ける。無償だから親たちが喜んでくれると思った。

しかし、説明会を持った時のスラムの住人（親）たちの反応は、思いもかけないもので、当惑した表情の人が少なくなかった。懇意になった住人に事情を聞くと、スラムの中できちんと戸籍を持っている人は少ないという。前科のある者や複雑な家庭事情を背負っている人びとが多くて、子どもの入学に戸籍を、といわれると躊躇するのがスラムの住人の姿だと聞かされた。スラムの人々を理解しているつもりだったが、その実情を分かっていない自分に気がついた。といて、戸籍抜きの学校在籍はかなりの無理筋だった。区の教育委員会から、区だけでは判断できないから都や文部省に照会する時間が欲しいと言われた。

○「先生助けて」の声

しかし1955（昭和30）年の秋頃から、嫌な噂が耳に入ってきた。地下鉄丸ノ内線は1954（昭和29）年1月に、池袋—お茶の水間の運転が始まったが、1956（昭和31）年3月には淡路町まで、その後7月に東京、さらに、1957（昭和32）年に西銀座まで開通する計画だという。そうなると、地下鉄駅の真下（後楽園駅は地上2階）に大きくスラム街が広がるのは景観的にも望ましくないと、スラム街撤去が決定されたと聞かされた。大人は江東区にある都営住宅に移住させられ、戸籍のない子は児童養護施設にという計画と聞かされた。しかし住めば都で、スラムの住人は移転絶対反対だった。我々も心情的にスラムの住人を支持した。

1956（昭和31）年2月にスラムの撤去作業が始まった。我々も撤去反対のスクラムを組んで反対運動をしたが、警察力の前にはまったく無力で、消火用のホースで水をかけられ、一人ずつ引き抜かれた。後ろを振り返ると「子どもの家」もブルドーザーで破壊されていた。

泣き叫ぶ子どもたちはトラックに乗せられた。トラックがスラムを離れる時、「先生、助けて」と子どもたちの声が聞こえた。しかし、幾重にもスクラムを組む警察力の前に、われわれはまったく無力だった。あの日の屈折はいまも胸の片隅に残っている。

○子どもの声に答える人生を送ろう

スラムが撤去されてからも、「助けて」の声が耳に残って無力感に襲われ、何もする気になれない日々が続いた。しかし4年生になって、卒論や就職問題が迫っていた。その上、撤去反対運動をした時スクラムを組んで抵抗する写真を、警察に撮られていた。そうした写真があると、教員には採用してくれないという噂が流れてきた。抵抗のレベルは違うが、不採用の実例も存在するという。そこで、スクラム組は教員を断念して、新聞社や出版社を受験することにした。

しかし筆者は、スラム撤去の際の自分の行動が妥当だったか疑問を感じていた。あの時は心情的にスラム撤去反対運動に参加したが、駅前の景観を考えると撤去は妥当であった。しかし、あの子どもたちの児童相談所送付は、彼らによき人生を提供できるのか。と言って、一生をスラムの住人として過ごすことも出来ないであろう。それなら、どうすればよかったのか。そして、学校はこうした子どもたちにどう対応が必要だったか。正解を出せない自分の非力を感じた。

その頃から大学院の受験を考えるようになった。しかし大学院進学には2科目の語学試験と専門科目の試験、さらに卒論の出来が問われる。しかし後樂園での活動に熱中して、授業等を少なからずサボっていた筆者に、大学院の受験は無謀な試みに近かった。それでも、「助けて」の声に答えるために猛勉強を始めた。夜間には、当時湯島聖堂にあった「紅露外語」に通って、ドイツ語を勉強した。英語は当時のアメリカ文化センターで卒論作成のためにアメリカ事情の文献を読みあさって、幸運にも何とか大学院に合格することができた。

それから半世紀以上を経た。振り返ると、あの日の「子どもたちの『助けて』の声に答えたい」が、一貫して筆者の研究者人生の土台にあったのではと思う。当時、あの子どもたちの期待には応えられない自分であった。しかし、子どもの力にはなりたいという気持ちのまま、子ども問題の研究者として過ごした半世紀だった。そして現在、里親と里子の問題をも自分の研究の一分野にしているが、脳裏にあるのは、後樂園で出会ったあの日の子どもの声と姿である。そして、2018年3月に仲間と立ち上げた「日本子ども支援学会」では、児文研時代の学友と同じように、真摯に子どもにかかわり、子どもの問題を考えていこうとする仲間たちに多数恵まれているという気持ちでいる。身体の衰えは隠せないが、心だけは18歳の青年のままの自分を感じてもいる。(了)

〈付記〉

深谷和子（東京学芸大学名誉教授）

筆者が東京教育大学の教育・心理学科に入学したのは昭和29年4月だった。定員を少しオーバーした63名の新入生の中で、女子学生はたった5人。校舎も、コンクリート4階建の1棟を除いては全て粗末な木造で、10個ほど並んだトイレも、一番入り口に近いドアの一つに、「女子専用」の木札が付いているだけだった。

後でわかったことだが、その頃は1級上の先輩たちが、子ども会の活動を立ち上げて間もない時期だったらしい。入学して間もなく、女子学生の友人とサークル長屋（部室）の近くを歩いていたら、「児童文化研究会」の表示のある部室に何やら人が出入りしている。顔見知りの男子学生に聞くと、子ども会の準備をしているという。それがきっかけで、児童文化研究会の活動に参加することになって、秋の学園祭に向けて人形劇に使うカシラを作り、秋の学園祭でもセリフ担当で参加することになった。その年の学園祭のメインゲストはシャンソン歌手の芦野宏氏で、木造の大きな講堂いっぱい響く声で「ボーラーレ！カンタービレ！」と歌ってくれた。

人形の使い手は、中腰で両手を使い（左手で人形の大きなカシラから通る心棒をもち、右手で下から人形の目や口を動かす糸を引く）、力もいるので、男子学生の役割だった。詳しい経緯は省く

が、初夏にはスラム街での子ども支援活動にも加わっていた。すでに「子どもの家」も建っていた。

スラムの子どもたちはただ薄汚れ、得体のしれない生き物のムレのようであった。

そうしたスラムの子ども支援のために、一つの提案をしたのがフィンガー・ペインティングだった。きっかけは、はっきりとは思い出せないが、筆者は子ども時代絵が得意な子だった。将来は絵描きになりたいと思っていたが挫折して、大学で心理学を学ぶ羽目になった。当時心理学では実践畑で色彩象徴論が関心を持たれはじめ、とりわけ子どもの絵の表現に関していくつもの著作が出版されはじめていた。これには洋画家の北川民次（1894年～1989年）がアメリカ、メキシコから22年間の美術活動を終えて帰国し、独特なデフォルメによる生命感あふれる絵が人々の注目を集めていたことも背景にあったのかもしれない。北川は静岡県出身であったが、日本の権威の象徴であった富士山だけは描かなかったという、異色の画家でもあった。もしかしたら、彼がメキシコ在住の間に、原住民の子どもたちにフィンガー・ペインティングの技法を使って絵を描かせたとの記載が、何かの著書にあったのかもしれない。児童中心主義の美術の教育に関する著作が、岩波書店（1952）や創元社（1953）から出版されていた。

なおフィンガー・ペインティングとは、指絵の具（ゆるい糊状の絵の具）を使って、指や手のひらで、紙に直接模様や絵を描く技法である。絵を描くというより、子どもの場合は泥んこ遊びに近いものと言えようか。現在は指絵の具も画材の一つとして発売されているが、当時資生堂がなぜかその絵の具を6色セットで販売していた。

子どもの家の床に大きな模造紙を敷く。子どもたちがそれを取り囲んで座る。赤、青、黄などの指絵の具を別々の皿に盛っておくと、子どもたちはそれを指ですくい、紙になすりつけ、塗りたくる。リッチな泥遊びのような展開と言えようか。現在は保育の現場などでも活用されているようだが、子どもたちが楽しむだけでなく、ストレスや不安の解消にもつながるとか。

当時、街でモク拾い（煙草の吸殻集め）や小さいカップライをしながら、灰色の固まりのようになりす汚れて暮らしていたスラム子どもたちが、床に敷かれた大きな模造紙を取り囲む。カラフルな絵の具を、大きな紙に生き生きとこすりつける。そこには、日常の屈折から解き放たれた子どもたちの自由な心の世界があったのかもしれない。

思い出すシーンが一つある。はじめはお互いにこわごわと接触していた学生と子どもたちだったが、ある時、人だかりがしているので遠巻きに見ていたら、子どもの一人が「なら、ションベンひっかけてやろうか」と大声で言った。中央にいた学生が「ひっかけてごらん」と言うと、その子は本当に学生めがけて放尿した。オシッコをひっかけられた学生は、咎めもせず、身じろぎもせず、そのまま立っていた。

筆者が2年生（昭和31年）の2月か3月に、バタ屋部落は何台ものトラックで撤収された。その後夫は大学院に合格し、1年後に筆者も受験した。青春の日々は麗しく、ひたむきで、ただ懐かしい。（了）

V. 会員談話室

会員自己紹介

庞 佳（ぼう か）（[上海杉達学院大学](#)：中国）

約5年前、大学時代の親友のおかげで、長崎の佐世保のある幼稚園の運動会を観戦したことがあります。組み体操やパラバルーンなどでがんばっている子どもたちや、気合を入れて子どもを応援している保護者たち、またリレーの試合でゴールにしゃがんで、走り込んできた子どもを抱っこしてあげる先生などが印象的でした。とくに、普段の練習の成果を真剣に披露している子どもたちの姿に感動しました。その時、年長組のうちの子が通っていた上海の幼稚園にもこんな形の運動会があったらいいなあと思っていたのです。正直に言いますと、中国の子どもたち、特に都市の子どもたちは、日本の子どもより過保護にされていると思います。「過保護」や「過干渉」はよく耳にする言葉ですが、どの程度やるべきかと悩んだりする親が多いでしょう。この度、日本子ども支援学会に入会させていただいて、幼児教育などについてたくさんの方が学べる機会ができて、少しでも親たちの悩みの解決に役立てればいいなあと思っています。一人ひとりの宝物である子どもたちに笑顔の花を咲き誇らせるように頑張りたいと思います。

近藤和子（[サンメディカル津田沼クリニック](#)）

時代の変化を肌で感じたため、二人の娘を持つ母親としての役割を考え、自分自身もまた人生の指針を得たいと、40歳を過ぎる頃から臨床心理学を学びました。小・中・高校でスクールカウンセラーとして現場での経験を経た後、現在は幼児期と大人の発達相談に関わっています。

仕事を始めた当初は、まだ学校では「発達障害」という概念も耳新しく、先生方が子供達を指導するのに頭を抱えている場面によく出会いました。今ではこの用語も広く一般まで周知され、逆にネット情報で不安が高まっているお母様方の相談も受けています。その10数年の間に医療での診断基準も概念も新しく見直され、また発達における環境要因の重要性が指摘されるようになりました。教育、福祉の現場では様々な支援体制が整備されてきながらも、変化の速度が速く、一種の混乱が起こっている可能性もありそうです。

多くの情報が錯綜すると共に、いたるところに矛盾が見えるようになった今の時代だからこそ、子供達を護り育てる大人の姿勢が問われているように思います。

矛盾を超えた知恵と、豊かな実りを子どもたち世代に手渡せるよう、今後とも会員の皆さまと共に学んでいきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

趙 珊珊（ちょう さんさん）（[上海杉達学院](#)：中国）

上海杉達学院の趙珊珊です。この度は、日本子ども支援学会に入会させていただき、誠にありがとうございます。

専攻は日中文化交流史です。約10年間ほど教職に携わっています。3年ほど前に、娘が誕生して初めて「教育、特に幼児教育っていったいどういうことか」を深く考えるようになりました。英才教育、早期教育教室、脳開発など、今、中国で幼児教育と言うと、そういうような知識領域のことが思い浮かんできます。でも、私は毎日一緒に食事をし、一緒に寝ている親、そして中国のほとんどの家庭では祖父母が育児を手伝っていますが、親や祖父母が子どもにたいして多大な影響を与える存在であることをいつも深く考えています。子どもが身体だけでなく、心も健全に育ってくれて、いつも笑顔を見せてくれるのは私にとって何よりです。それはどんな学習教室に通っているかとは関係なく、親子関係、家族の雰囲気、親の育て方と切り離せないものだと思っております。

まだまだ幼児教育の初心者ですが、本学会に入会させていただいたことは、これから広い視野で乳幼児教育を考える良い機会であると喜んでおります。どうぞ、よろしく願いいたします。

今津尚子（九州女子大学）

日本子ども支援学会の皆さま、今年度入会させていただきました、九州女子大学人間科学部人間発達学専攻で教員をしています今津尚子と申します。「風の便り」や「子どもQ&A」を毎回楽しみに、拝読させていただいています。

私は福岡県北九州市内の保育所で、園長として民間保育所の設立、公立保育所の民営化や小規模保育所の設立、運営に長年従事してきました。また、同時進行で複数の大学で乳幼児教育学、社会福祉学等の分野で授業をして参りました。現在は九州女子大学に所属し、乳幼児教育・保育内容についてアクティブ・ラーニングの教授法の開発や社会福祉、児童福祉については、保育者養成において子育て支援力の育成や地域連携に関する教授法の実践研究を行っています。

実践研究の成果として、北九州市内で保育所・幼稚園の設立、運営のコーディネーター、乳幼児教育アドバイザー、職員・保護者研修会、民生委員・主任児童委員研修会、子育てサポーター養成講座、市民カレッジ等で講演し、子ども支援の啓発活動を行っています。

今後は日本子ども支援学会の皆様のご指導ご助言を賜りながら、なお一層子ども支援について学ばせていただきたいと存じます。最後になりましたが、子育て応援メッセージとして「[尚子先生の心のスケッチブック](#)」という民間ラジオのパーソナリティーをしています。ユーチューブやスマホで視聴できますので、どうぞよろしく願いいたします。

大久保淳子（福岡県立大学人間社会学部）

福岡県立大学人間社会学部人間形成学科で保育者養成課程のコースに所属しています。現在、保育現場では、「保育の質」や「保幼小の接続」が課題となっています。

このような現状から、「保育の質の向上」と「保幼小の滑らかな接続」について研究をしております。また、東南アジアの就学前教育の研究もすすめています。2018年12月下旬にカンボジアの幼稚園の視察をしました。「カンボジアの子ども達の教育を支援する会」の会員で、絵本を贈る活動をしています。その縁で、首都プノンペン郊外のカンダル州キエンズヴァイにある農村地区のコップ・ブラック村にある小学校の併設幼稚園を2園、視察し、その後、絵本を読んだり、手遊びやゲームなどの保育もさせていただきました。幼稚園の保育内容は、小学校への就学準備という位置づけで、クメール語が記載された動物のペープサートや数字が記載された掲示物がありました。ほとんどの子どもが合掌をして、挨拶をしてくれました。礼節を重んじながらも、子ども時代を子どもらしくイキイキと生き、その目の輝きに国の未来を感じました。

今後も、このような機会を大切にしていきたいと思えます。

句会 むさしの

○市振りの朽ちし地蔵や石露の花 安田 勝彦 艱難の旅の結びや冬紅葉

二年をかけて奥の細歩き 11月13日結びの地、大垣に到着をしました。最後の旅のスタートは、新潟県糸魚川の親不知、子不知の難所を越し、市振の地に向かいました。市振は、芭蕉が、奥の細道で詠んだ艶っぽい唯一の句、「一家に遊女も寝たり萩と月」と詠んだところです。朽ちたお地蔵さん、黄色い石露の花が印象的でした。奥の細道は、フィクションのところもありますが、全体の構成を考えながらの紀行文となっています。結びの地大垣は、まさに冬紅葉でした。

○ウォーキングひと筆描きの愁思かな

市原 潤

秋出水地の高低の明らけし上善は水のごときや草紅葉

「上善如水」は老子の言。『老子』第8章に「水は善く万物を利して争わず、衆人の悪む所に処る、……」、また、第17章の聖人論では「大上は下之れ有るを知るのみ、その次は親しみて之れを誉む、その次は之を畏れ、その次は之を侮る、……」とあります。水は比喻でもあるので、第三句は「水のごとき……、や」の意です。

○落ち葉搔き 芋と煙は 過去となり

森永 徳一

近くの公園で、高齢者の方々が、櫟や栲・桜等の落ち葉搔きをしながら、昔は近くの子も達が、薩摩芋を持参して、学校のことや遊びのこと等を落ち葉を搔いた後で、焼き芋談義をしたものですね……。過去を懐かしんでいたのを句にしました。(妻の車椅子散歩の帰路にて)

我や先 薔薇一輪の 夢のあと

近くの薔薇の公園に、剪定前の薔薇が、「バラ祭り」(5月)以後、咲き遅れたままになっている。しかし、咲き遅れた薔薇も、力いっぱい咲いているのを眺め、人の一生を感じた句です。人から称賛されて咲く薔薇、人知れず精いっぱい持ち味を出し咲く薔薇、そして、薔薇……。

○泥田でも刈れるさいわい千葉おもふ

上島 博

週末ごとに来る大雨、稲刈りは延期をくり返す。雨が上がって2日後、やっと稲刈りに取りかかったが、地面はどろどろ、バインダー(稲刈り機)は立ち往生。すでに刈り倒した稲、束は、いやでもはぜ(稲架)まで運ばなければいけない。泥で足を取られながらの作業は、いつもの何倍も体力を奪う。でも台風と豪雨の被災地のことを思うと、こうして収穫できるだけでもありがたいことだ。そう自分に言い聞かせて、もうひとがんばり。

○会記より こぼれ落ちたる 秋見つけ 三輪 葉月三溪園 落ち葉の香合 辿

りつつ結いし髪 解き放ちたり 秋の風

娘の出身中でのママさん茶道部もまだ続いていて、文化祭でお茶会を開きましたので、茶道がらみのものを、また、夏の間暑くてくくっていた髪もようやくおろせるくらい涼しくなった様子を、これも娘をよんだものです。

イベント情報

第7回ワークショップ 2019.11.30(土) PM.2:00~4:00 於：東京駅八重洲口
ルノアール会議室

「現代の親の養育意識を探る(学会調査)」

深谷昌志(東京成徳大学名誉教授)他 司会：河村 真理子(育英幼稚園園長)

第 8 回ワークショップ .2020.2.1 (土) PM.2:00~4:00 於：東京駅八重洲口
ルノアール会議室

「里子・里親問題を考えるー里子の自立とウエルビーイング」

演者：青葉紘宇（東京養育里親の会）・深谷和子（東学大名誉教授）

司会：石田 祥代（千葉大学教授）

*11月23日に日本福祉心理学会での自主シンポジウムでの発表資料から

第 9 回ワークショップ 2020.5.9 (土) PM.2:00~4:00 於：東京駅八重洲口
ルノアール会議室

「多国籍化する学校・II」

講師：土田雄一（千葉大学教授） 司会：由田 のぼら（東京成徳高校教諭）

第 10 回ワークショップ・オープン 2020.8.14 (金) PM.2:00~4:00 於：東京駅八
重洲口ルノアール会議室

*発表者を募集し、9月中旬には決定する予定です 司会：明石要一
（敬愛短期大学学長）

みなさま、ふるってご参加ください。会員でない方のご同伴も歓迎いたします

編集後記 (ニューズレター委員会)

災害の多いこの3ヶ月でした。

今月号は、2つの大きな実践報告を掲載させていただきました。実践報告1は、はるか沖永良部島での子ども支援の報告、その2は、70年近く前、東京（現在の後樂園球場の近く）にあった大きなスラム街の子どもたちへの、当時の大学生たちによる子ども支援の報告です。自己紹介欄にも2名の中国の会員から、達者な日本語でご投稿がありました。

（誌面の都合で、「子ども研究」ノートと「新書版に見る子ども問題」は次号に先送りさせていただきます）

みなさま、〈自己紹介〉欄や〈句会むさしの〉へのご投稿をお待ちしております。

（kazukofukaya@nifty.com） どなたも、どうぞよい年をお迎え下さい。（深谷）

〈編集委員〉深谷和子（長）・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2019年12月号目次〉

[今月の花・今月の詩](#) 細江久美子・ゆあさとしお I [実践報告1](#) 外山千草 II
[実践報告2](#) 深谷昌志、深谷和子 III [会員談話室会員自己紹介](#) 龐佳（ぼう
か）、近藤和子、趙珊珊（ちょうさんさん） 今津尚子、大久保淳子 [句会むさ
しの](#) 安田勝彦 市原潤 森永徳一 上島博 三輪葉月 [イベント情報](#)（第7回から第10回
まで） IV 編集後記（深谷和子）